

はじめに

昭和二十八年に朝鮮動乱の停戦が成立し、それとともに戦後の日本経済の支えとなってきた動乱特需も無くなり、立ち上がりかけてきた日本経済は深刻な不況に突入しました。そんな年に私達は小諸実業高校に入学したのです。

続いて翌二十九年は戦後最悪と言つ凶作の年で、降り続く長雨と冷夏にたたられて、全国的な米の収穫は戦後最悪を示しておりました。また、政治的には戦後政治の一時代を画した吉田内閣が総辞職して、多くの国民の期待をになつて鳩山内閣が誕生しました。

その年も暮れた翌昭和三十年の三月三十日から車中泊二泊を含む四泊五日の伊勢奈良、京都、大阪、金沢方面の我々の修学旅行が行われたのです。そして奇しくもこの旅行中に校名が小諸商業高校に変更になりました。

当時はまだ誰もが豊かではなかった時代で、大学はおろか、高校進学率すら五十パーセントを割るような時代ではなかったかと思ひます。そんな中で、乏しい家計

の中から修学旅行にまで行かせてもらえる事は押さえがたい喜びであつたと記憶しております。そして、その旅行も、これら生徒の家庭の事情を考慮してのぎりぎりに経費を切りつめた企画でした。今では考えられない座席指定も無い普通列車を利用し、しかも旅館費用を減らすために重い米まで持参の旅でした。

それでも飛び立つほどの喜びに満ち溢れた四日間の旅でした。折角与えてもらったこの時の体験を何一つ見落とすまいと思い、貪欲に見聞し、この時の記憶をもとに後日何冊かのノートの端に書き留めておいたのがこの旅行記です。

その目的は、当時としては、今後二度と行けるか分からない関西の思い出と、乏しい家計の中から旅行に行かせてもらった家族に対する責務のようになさ感を感じていたのです。その後歳月の経過とともにこの時の意気込みも薄れ、またこの旅行記を書いたノートも行方不明となっていました。それが昨年、定年退職を期に、家の中を徹底的に整理を行ったところ、古い書類の中からこのノートが出てきたのです。

誤字脱字の多いその内容を見てみるといささか冗長ではあるが、少年から青年に成りかけた少し斜に構えて背伸びした自分と、級友諸君との交わりがかなりの細密に書かれていました。物の見方などは本質を見ないでかなり表面的なところもあり、いささか勉強不足の感は免れず、今更ながら恥ずかしく思っております。

現在関西に在住し、今年になって当時のコースを何回かに分けて辿ってみると想像を絶する強行軍であり、あまりに欲張りすぎてかなり短絡的な旅行だった様な気が致します。特に近江八景の一つ、「三井の晚鐘」で知られる三井寺などは全体の中のほんの一部で、実際は沢山の堂塔伽藍を持つ名刹であることを知るには程遠いものでした。

あれから四十余年の歳月の経過と共に、私達の訪れた街も大きく変貌しておりますが、神社仏閣などは今なお当時のままで、その情景描写は思いのほか正確でした。ただ、この時期、関西は椿の花が最盛期であり、文中にも何度も椿の事が記載されていますが椿の花の時期は終わっていたと言つ記載が不思議に思い、その地を訪ねてみました。

それは落葉樹が多くこの時期冬枯れの景色を見慣れた私にとって光り輝く緑の葉はやがて来る春への憧れであり、この地に多い照葉樹は全て椿と錯覚したのではないかと推測いたしました。

今回の再訪の中で、どうしても確認できなかったのが宿泊した旅館でした。文中の京都大丸の近くで、番傘に「丸に茂の字」の家印の旅館を目当てに探しましたが見つかりませんでした。この時改めて知ったことですが、当時、二日目の夜に皆で

舞子の踊りを見学したのですが、この時の支払いが全体で三千円だったのです。当時の家計の総支出に近い金額であり、大いに驚いたのですが、実はこれが本物の舞子ではなかっただろうというのが今回聞いて回った旅館の主の話でした。

また、私達は駆け足で通り過ぎた比叡山の門前町坂本には全国三千八百余の山王神社の総本宮日吉大社がありますが、その参道を通って比叡山に向かったのです。今この参道の両側は堂々たる桜並木になっており、当時は目にも留まらない小木であったのが四十余年の歳月の経過と共に巨木となっていたのです。

そして今回の再訪をもとにワープロで編集し直したのがこの旅行記です。内容、構成については極力原文に添う事とし、誤字、脱字の訂正と、事実と相違するところは（ ）書きに通釈を入れるにとどめました。

青春を走り抜けた同級生諸君の若かりし頃の思い出を呼び起こし、話の種にでもなればと思いい読に供する次第です。

平成十年十一月

篠原雄四郎